



お弁当も詰めます



惣菜準備は毎日大忙し



しっかり量を確認して

### つながるといふこと

ワークステージ「銀河の里」では、ほぼ毎日惣菜販売に出ている。私も、ワーカーさんと実際に惣菜販売に出ており、花巻市内はもとより、近隣の北上市、盛岡市など、現在販路の拡大にも努めている。

私にとって、何かを販売するという事は、大学時代に行っていたアルバイト以来のことである。当時、私は大手スーパーの食料品販売のアルバイトをしていた。だが、その時はあくまでアルバイトというどこかお客さんとは一線を引いた身分で、販売の業務をこなしていた、そんな風に思う。

だが、今は明らかにこちら側の「顔」が見える。一つ一つのやりとりが、ものすごく大切なように感じる。今の私は、表情や口調、言葉遣いなど、どこか自分の中で考えているような気がする。しかし、ワーカーさんはなぜかそこが自然である。その自然な姿が、お客さんにつながっているのではないかと思う時がある。それを見ている自分も、なぜか微笑んでしまう瞬間がある。

思えば、私は「銀河の里」にやってくるまで、その自然な姿をあまり出すことができなかったように思う。だが、ここでの関わりの中で見えてくる自分は、今まで見せてこなかったような自分のように思う。

つながるといふこと。その形にもいろいろあるのではないか。そう改めて感じている。今までとは違うつながり方も、自分の幅を広げるため、自分自身に自信をつけるため、必要なのではないかと思う。(清水)



### 里のひとつま



### 編集後記

最近、自宅の部屋からぼんやり外を眺めることが多い。時間は問わず、なぜか外を眺めている自分がいる。何を見ているのか。そんなことはその時考えていない。おそらく全体を見ていたのだろう。ただ、その後一つだけ見ているものがあると思った。それは自分の内面。事例発表会に向けて、また終わった後で、自分を見つめ、何かを感じた。夜には、ほのかな黄色い光が見える。田舎ならではの光なのか、蛍が一匹何かを照らし出している。日中では感じない、何か特別に照らし出されている感じ…。そこに不思議な魅力を感じてしまった。明るさなのか、妖しさなのか。何か自分に重なるような、そんな気がした。

何を言いたいかわからないが、それでは、また次号…。

(清水)

### 執念とファンタジー

宮澤 健

なんと、会えた。谷川俊太郎さんに会えただけではなく、意図もしっかり伝えることができた。その気になってがんばれば、通じることはあるようだ。世の中はそう捨てたものじゃないのかも。

出かける前、手紙を書いた。里の雰囲気とやろうとしていることを伝えるため、写真やこれまで書きためた絵などを編集してファイルを作った。しかしこれを手渡せる確証はなかった。タケミツ役後10周年のイベントのひとつとして、八ヶ岳で行われるコンサートの企画の中心者とはいえ、多忙で高齢の谷川さんが来るかどうかさえ解らない。

今回の参加は、新人研修の一環として行った。この春の新入職員が中心に手渡すファイルを作り、施設長と二泊三日の旅に出る。出かける前、私は、会えても会えなくても良いから、コンサートを味わって来たらいいと送り出した。

会って渡すことに気持ちが一杯では落ち着いてコンサートも聞けず、タケミツを味わえなかったのでは研修も意味がなくなる。会えた会えないは縁だし、相手だって何処の馬の骨ともわからない怪しい奴らに関わっているどころじゃないのが現実なのだから、渡せずともまあいいのではないかと気楽に構えてもらいたかった。

ところが本人達はそういうわけにはいかなかったらしい。特に施設長はこうなると執念の塊になる。なんとしてでも渡さねばと燃えだぎっていた。仕事はこのバランスが大事だと思う。やるべきことはやったのだから、あとは運や天にまかせるという鷹揚な構えと、なんとしてでも果たさずにはおくものかという鬼のような執念。宿舎に着いてからよけい気が気でなくなり、会場に行ってみたらそこをうろろろする。楽屋は、準備で向こうだって必死の調整中だろう。手段はない。どうしたら会えるのだろうともう祈りの状態でした。そこにバツリ廊下を歩いて来るのはなんと本人ではないか。

うそだろうという気持ち、夢かしら、祈りが通じたのか、もう神懸かりに近い。大物谷川俊太郎、その人が目の前にいることもすごい、このバツリが驚きだ。4人は駆け寄り、施設長が声をかける。幸運に声が震えながら何とか伝える。ファイルも渡せた。

コンサートでは谷川さん本人の朗読もある。外は雨で、それがまた雰囲気醸しだし、豊かなイメージの世界が展開する。一同、深い感動に浸った。

さらにその後のディナーではなくじりきで、谷川氏のすぐ隣のテーブルに。なんと谷川さんは自分から席に来てくれて、「見せてもらいました、絵も良いですね」と褒めてくれるではないか。出版を考えているならと出版社も紹介してくれた上に、「私の名前を出してあたってみて」と言ってくれたのだ。うますぎる話だが、現実のことだ。会うことはできた、今後出会いになっていけばと思う。

何とか里のことを社会に伝えたい。里で生まれる「生きる」物語を語りたい。スタッフは、生き生きしている。認知症も捨てたものではない。若者もたいしたもんだ。おばさん達もすごい。そんな里の語りを伝えたい。

新人にとっては、タケミツのファンタジーと施設長の仕事に対する執念の両方を体験した良い研修になったのではないかな。

私は今月出版社に出かけてみようと思う。



## 銀河の里 5周年記念事例発表会を終えて

去る8月6日、『銀河の里5周年記念事例発表会「事例を生きる」～出会いと変容のプロセス～』が花巻市文化会館を会場として行われました。

参加者はおよそ70名で、今回は福祉の仕事に従事している方を対象として行いました。今回は3つの「事例」について、臨床心理士である吉田耕治先生、長須正明先生をお呼びし、途中討議の時間も加えながら、様々な視点から検討がなされ、今までにないやりとりができたような気がしました。

今まで「銀河の里」で起こる一つ一つの「出会いと関係の物語」を、いろいろな場でどうにかして発表したいと試みてきました。しかし、なかなか「銀河の里」で紡ぎ出されるこの物語を、発表する場がないというのが現実でした。多くの場で異端児のような扱いをされ、なかなかつながらない、語れないという苦い経験を幾度となくしてきました。

そこで今回は「銀河の里」が中心になって、全てのことを行いました。事例発表者の3人は、当日まで「事例」について、何度も何度も推敲したり、読み返したりしてきました。また、他のスタッフも前日までの準備、冊子作りから会場の準備など、また当日も昼食の準備まで行い、本当に「銀河の里」のスタッフ全てがこの日のために取り組みました。

まず、終えてみて感じたことは、「なかなか大変だ」ということです。終えてみるとあっという間なのですが、やはり準備の段階から当日を迎えるまでにあたっては、なかなか大変でした。

ですが、大変なだけでなくなかったような気がします。その準備の段階から当日を迎えるまでの中で、スタッフ一人一人が何かを意識できたはずで、まず、事例発表者にとっては、この「事例」というものをまとめ、発表するということが、大きな意味があったはずで、「事例」というものが、自分自身を語り、今後の自分自身の生き方にもつながってくる。それは、ものすごいことだと思います。また、他のスタッフにとっても、自らの「銀河の里」での位置や今の精神的、身体的状態についてなど、それぞれ様々だとは思いますが、それらを意識でき、その中で一つのことをやり遂げたということは大きかったのではないのでしょうか。

「事例」というものには、何か特別な力があるように思います。私は「銀河の里」に来て、はじめて「事例」というものに出会いました。「事例」というものが何なのか、その当時は何もわかりませんでした。それでも、それに触れた時、私はなぜか涙が出たことを覚えています。本当の「事例」というものに個々が触れた時、そこには何か起きるのではないのでしょうか。それは福祉の分野に限らず、どんな分野の方にも、通じるものではないのでしょうか。

今回、このような機会を持つことが出来たことは、本当に貴重だったと思います。今回は、5周年という節目ではありましたが、私たちは今後もこの「事例」を通して、深めていきたいと思っています。今後の「銀河の里」にも、どうぞご注目下さい。(清水)



事例発表会のひとこま



## 梅干し作り



真っ赤だね



一つ一つ丁寧に



乾くかねえ？



きれいなしその葉



まだ黄色い梅



乾燥中…

先月号で紹介した合同梅漬けに引き続き、デイサービスでは梅干し作りにもとりかかった。そしてグループホーム「みつきんち」の梅漬けも引き受け、毎日のように青梅やしその下準備をする。今年、梅漬け初挑戦だった私も慣れてきて、その作業行程を利用者とゆっくり過ごす余裕もでてきた。そのやりとりの中で、印象的なお二人がいる。「梅なんか漬けた事ないからわからない」と言いながらも、「どうしてわからないかと言うと…」と普段なかなか聞こえてこない自分の話を、生き生き語りだすAさん。またBさんは、「梅漬けはよくやったよ、この位でいいんだ」と、若いスタッフに指導をする。しかし準備していた塩はずいぶん余っており、これで良いのかとまどうスタッフ…。Bさんは比較的最近デイサービスの利用を始められ、何をしても控えめな様子で過ごしていたが、梅がその方を動かすのか、作業に関して声を掛けるとすくっと立ち上がり、どうするの？と聞いてくる。毎年毎年当然のように、梅を漬ける。それはBさんにとって、生活に欠くことのできない重要な作業としてある。では、私の生活になくしてはならない事柄とは？と考えさせられながら、一緒にしその葉をザルに並べていく。テラスに出て作業していると、自然とグループホームの入居者がやってきて、Bさんと一緒になって「このやり方じゃあ駄目」とお言葉が…。そうこうして、土用丑の日を待つ。晴れの日AさんBさんと一緒に梅を干したかったが天候に恵まれず、持ち越し。結局、天日干し作業は、他の利用者として「夫婦とは…」という話で盛り上がりながらやった。それでも下準備から干すところまで、人と人が自然な流れの中、協力しながら、何やかにやとやりとりをしながら作業が進む。その過程全体、また、一場面がとても面白く、しっかり私の生活の中に入っていた。実のところ、梅は干しすぎてカラカラなのだが…。それが今年の銀河の味、私の味？？里に来て2年目、利用者に関わる中でみえてくるもの、感じられることが、より一層リアルになってきた。里ですごす時間の中で、梅がゆっくりと、さらにまるやかになっていくように、私も私だけのいい味をつくっていかれたらと思う。(牛坂)

## つれづれみなみ 葉月

先の日曜日、世話人のSさんが利用者全員を引き連れて、病院周りのゴミ拾いをしました。普段しない1時間の外作業で、全員その日は疲労困憊の体だったようです。みなみ開始当初を考えると、全員で外で作業するというのは考えにくかったことです。冬だったこともあるのですが、雪かきは特定の利用者か世話人、支援員の仕事でした。利用者全員で外作業をすることが出来たことが、みなみで一緒に6ヶ月過ごしてきたことを示しているように思います。言い尽くしたことのようで恐縮ですが、生活が息づく、絆があるというのはこういうふうに見えてくるものなのでしょう。ゆっくりと、みなみで暮らしが息づいています。(高橋)